

十五年は一葉とともに

荒井とみよ(教授・国文学)

「大谷大学に来られて何年ですか」という質問を受けるたびに、わたしはささやかな幸運を感じたものだ。着任が平成元年だったから数えやすいのである。振り返ると、わたしの大谷大学での十五年は樋口一葉とともにあった。ゼミのテーマをはじめから一葉と決めていたわけではなかった。国文学講義では、さまざまな女性作家を取り上げた。宮本百合子、平塚らいてう、伊藤野枝、岡本かの子、林芙美子、尾崎翠、長谷川時雨たち。それまでそういう講義がなかったらしく、受講生が多いことを除けば楽しい雰囲気教室だった。近代文学のゼミを担当することになって、あと何年の仕事であるかを考えざるをえなかった。一年も無駄にできない。

「ちょうどそんな時」というのはあるものだ。長年の友人である西川祐子氏からどっさりとした依頼が届いたのである。「シリーズ民間日本学者」の一冊『私語り 樋口一葉』(リポート、1992)のゲラである。著者は一年間、フランスのエックス・アン・プロバンスに出かけるという。出版社からフランス在住の著者とわたしのところに一部ずつのゲラが届くことになるという。それぞれが送り返して、編集者が二つの校正をまとめるというのだ。

初稿というのは自分のものでさえ、一瞬途方にくれるものだが、分量といい内容といい、書下ろしをしたことのないわたしを脅かすに十分な出来事だった。しかし、結論を先に言う、これがその後十年あまりのゼミの行方を決めることになったのである。ときどき若い研究者から「校正くらいお手伝いします」といわれることがあるが、よくそんな恐ろし

いことを簡単にいうと内心想うのは、あの記憶からいまだに解放されていないせいらしい。

それに先立って、その著作に使った膨大な参考書や資料の数々をわたしの研究室に引き取って欲しいといわれていたのは、この校正のことがすでに計画の中にあったからであろうか。深謀遠慮というほかはない。しかし著者が自身の校正のためばかりを考えていたのではなかったことは、その後の身の振り方に大きくかわった次第を見ても明らかである。わたしはそのことで育てられたし、その後それらの参考資料で何本の卒業論文が書かれたことであるか。

「字句の訂正でいいよ」と簡単にいって著者はフランスに出かけて行った。「私語り」というタイトルどおり、これは膨大な日記を残した一葉がもう筆を取れなくなってからの物語、結核性の発熱のために夢うつつの境をさまよう魂が甦って語りかける物語であるの



『私語り 樋口一葉』

だ。校正の作業も呪文にかかったような、憑依の時間だった。当時は京都に部屋を借りていたから帰宅時間を構わずに校正をすることができた。目の前の書棚にすべての資料が揃っているのだから、言い訳ができないのであった。

粗忽な読者はこれを小説だと思うであろう。小説は研究書とは違うとも思うであろう。しかしこの原稿の恐ろしさはすべての事項が出典や資料を明らかにしていることである。本文はたしかに想像力を刺激するスリリングな展開だから作業も勢いに乗れるのだが、問題は注記である。膨大な分量もさることながら、大学でのテキストにも堪えられるように、引用部分の巻や頁が明記されている。筑摩書房の『樋口一葉全集』は全巻揃うのに20年がかかっている。編集委員の多くがその間に冥界の人となっていた。その最終刊行は1994年である。

「おもふどちいざ帰らむといひながら又あくがる秋ののべ」という引用がある。和歌の分かち書きになっている。終ってみればコロンプスの卵なのだが、「おや？」と思ったのでいつもそこに赤で「？」をいれるのに、著者校了の段階でもそのままなのだ。結句は「秋ののべかな」である。和歌索引をなぜ用いなかったのか、その一首を探すのに研究室で夜がふけた。すでにわたしは西川氏の術中に落ちていたのである。今こうして思い返すと、それらのこともただ懐かしい。

こうしてわたしはゼミでずっと一葉の日記を読み続けることになった。日本文学の講義の中でわたしが選んだ女性作家たちは、ことごとく一葉の文学とどう向き合うかをみずからの問題として出発したのであった。平塚らいてうの、長谷川時雨の、そして宮本百合子の一葉論は、いまだに燦然とかがやく光を失っていない。それは彼女たちが全霊をこめて取り組んだことの証明である。だからわたしが最後の仕事としてテーマに据えるのには

必然性があった。あの校正に費やした時間を無駄にしたくなかったというのは些事である。

十五歳のときの記録「身のふる衣 まきのいち」は王朝の女流日記のスタイルで始められた。おそらく今紫、今清少を意識しての出発である。古語に苦手な学生を引っ張って牛歩のごとき十年であった。まだ樋口夏子でしかなかった若い女が恋をすころから、解読作業は弾みが出てくる。しかし、あーだ、こーだという議論になかなか頁が進まない。明治の風俗にも無縁の学生である。「机を出し」の解釈で、机が家の外まで出たこともあった。「宮城野の萩」は継ぎ接ぎだらけの着物の自嘲なのだが、それもなかなか読み取れない。大笑いで終わった時間と教室が思い出される。

明治二十五年、半井桃水が出した同人雑誌『武蔵野』において初めて一葉という筆名で登場するが、そのあたりでゼミは終わることになった。その四年後、明治二十九年七月で日記が閉じられようとは書き手も知らない。作家として世に出る前夜、いわば卵が割れてひよこの一葉が現れる瞬間の、ドラマを越えたドラマである。それは就職活動で苦労する学生の心に共振する。「わたしはなにものか」という悩みは学生自身のものでもあるのだから。彼らの記憶に一葉の日記と取り組んだことが、どんな痕跡となって残るのだろうかと思うことがある。結婚式の祝辞などで「花嫁は樋口一葉を読んできました」と紹介すると、うなずくのは老人たちだ。友人席はきょとんとしている。

しかし樋口一葉は今度五千円札の顔になる。あの一円二円に苦しんだ一葉がである。このニュースを知ったひとりのゼミ生が「せめてその一枚を一葉さんに上げたい」といって、みんなを苦笑させたが、今はちょっとした「時の人」である。朝日新聞が「一葉さん」という四コマ漫画で女子供にも分かる経済問題を扱っているのも面白い。ここに出てくる



新世社の『樋口一葉全集』(標題紙)

のは道路公団だの軍事費だの不良債権だのの話ではない。小市民の小さな財布を狙うくたびれたセールスマンに立ち向かったり、親の遺産の活用を提案したりする「一葉さん」である。生活にまつわるこまごまとした経済問題なのだ。「一葉さん」は薄かったという髪で銀杏返し of 小さい髷を結び、近眼の目を丸くして思案をめぐらす。ゼミの卒業生は遠い先で、「おばあちゃんは学生のときにこの一葉を読んでいたんだよ」と孫に自慢するだろうか。一葉は切手になった時も「日本で最初の女」といわれた。お札では紫式部に次ぐ。

一葉が話題性を持つのはあまりいい時代ではない。わたしは別の研究で十五年戦争下の表現の問題を考えてきたが、その間の資料を見ていると一葉関係の出版が多い。和田芳恵が一葉研究に入ったのもそのころである。あの苦しい惨めな戦時下で一葉が読まれたことは何を意味するだろうか。貧しさに耐えることを身をもって示し、その惨めさをことばの世界に再現した人、その表現の艶やかさで近代の夜明けを証言した人、しかも夭折である。ここには日本人の心の琴線を刺激するも

のが揃っているようである。たとえば『評釈樋口一葉小説全集』は1938年に、新世社の全集は1941年から翌年にかけて出版された。後者は大谷大学図書館にも入っている。それを知ったときに感じた大学へのある種の信頼はちょっと言葉にできない。あの時代に、大学の機能がことごとく停止させられていた時代に、ちゃんと選書業務が行われていたということであるから。

さて、そのようにしてわたしの資料と西川氏のものとはいつの間にか合流してしまい、定年だからといって約150冊の本は分離できなくなった。また、入れる場所の確保も困難な状況である。まして後進に使用してもらうことを考えると最善策は大学図書館しかない。現在、西川氏が在籍の京都文教大学には日本文学のゼミはないこともあり、大谷大学へということで合意してくださった。不思議なご縁ということになる。幸いここは交通の便もよいので、これを必要とする人たちに広く利用していただければ、これに勝る喜びはない。館員の方々がこちらの意図を汲み取ってもっともよい方法を考えてくださることになった。蔵書の後始末としてこんな幸運があらうか。ゼミの思い出も書庫に残り続ける。



樋口一葉関係資料